矢澤　健司

東京都

長男と次女が難病を抱えていたことから、1991年に障害を持つ子の両親が働けるように、子どもたちの放課後や休暇中の居場所となる「自主保育グループかるがも」を作る。2002年からは「NPO法人たすけあいぐるーぷぬくもり」で理事長を務め、訪問介護サービスなどの支援を行っている。また一般社団法人日本筋ジストロフィー協会副理事長を務め、インターネットの発達以前から筋ジストロフィー患者によるパソコン通信研究会を発足させ、同患者のコミュニケーションや最新医療情報の収集及び訪問診療の実施などQOL向上と社会参加のために研究、提案などの活動を行っている。

（推薦者：一般社団法人　日本筋ジストロフィー協会）

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団の安倍昭恵会長から表彰状を頂き大変光栄なこととうれしく思っており、今回の受賞につきまして、大変細やかで温かいご配慮を頂き社会貢献支援財団の皆様に感謝申し上げます。

36年前に生まれた長男が福山型の筋ジストロフィー症であったことから、多くの皆様に支えられてきましたが、その中で支えあうことの優しさが大切な事だと感じてきました。その一つに、日本筋ジストロフィー協会がありました。筋ジストロフィー協会東京支部の皆さんはとても優しく、不安を抱えた私たち親子を迎えて下さいました。お蔭さまで４人の子供（その内２人は患者）と明るい家庭を持つことが出来ました。その中で、何かできることはないかと転勤した先の岐阜支部で支部活動のお手伝いをしていた時に、会報の編集にパソコンやワープロで作っていた原稿を、そのころ始まっていたパソコン通信を使って形式の異なる原稿を一度ホスト局へアップし、それを１つの機種でダウンロードすることによりフォーマット変換することが出来、会報の印刷ゲラを打ち出すことに成功しました。原稿は国立療養所長良病院（当時）に入院していた患者さんにも手伝って頂き分担することが出来ました。

この経験から、パソコンやワープロの作業が筋肉の力の衰えていく筋ジストロフィーの患者にとても有用だとわかり、パソコン通信を活用することにより遠隔地の仲間とも交流することが出来る素晴らしいツールとして大きな可能性を持っていることを確信しました。

1990年にパソコン通信研究会を全国の成人患者が中心になり立ち上げ、1991年に秋の仙台大会で第１回の電子会議を大会の数か月前から各テーマについて書き込みを始め、当日もリアルタイムに会議の中継を行いました。この活動を積極的に行うため、総会で本部にパソコン通信のホスト局を開局することを提案し了承されました。ホスト局の設置には日本船舶振興会（現、日本財団）の支援を受け、通信端末のパソコン

やワープロの購入にも助成を受けました。通信技術を全国の会員に広めるため大会で電子会議を開催し、研修会やシンポジュームを開き、病院の指導室の先生方の協力をお願いし全国27ヵ所の筋ジス病棟に通信環境を整備していただきました。毎年開かれている筋ジストロフィー研究の発表の中で、パソコンを使ったITC技術が患者のQOLの向上に役立っているとの発表がなされています。

この他、今回の受賞の中には、地域で立ち上げた障害をもつ子どもとその家族の支援のための「自主保育グループかるがも」や地域での支え合いのグループ「NPO法人たすけあいぐるーぷぬくもり」の支援についても評価して頂いております。

現在は、一般社団法人日本筋ジストロフィー協会の副理事長、NPO法人日本障害者協議会理事及び「障害をもつ子どものグループ連絡会」の会長として障害をもつ人たちの地域での環境づくりのために活動を行っています。今後も微力ではありますが、少しでもお役に立てるように努力をして行きたいと思っております。

▲創立50周年記念大会記念写真　貝谷理事長ご夫妻と共に（韓国筋ジストロフィー協会からの花束を囲んで）

▲フランス筋ジストロフィー協会　国際部長 Madame Beatrice de MONTLEAU（2009/9/14）と共に、パリにて（日本筋ジストロフィー協会として初めての訪問）

▲2013年９月６日～８日　韓国筋ジストロフィー協会から日本の筋ジストロフィー専門医、OTを招待し講演会をソウルで行った。

▲平成25年５月19日
一般社団法人日本筋ジストロフィー協会
創立50周年記念大会追悼式挨拶（実行委員長）

▲毎年、苗場で親と子の雪国学校を20年間、実行委員長として運営してきた。

▲大塚駅前診療所で５年間、訪問診療を石原傳幸先生と共に行ってきた。

滝口　仲秋

千葉県

30代半ばで難病を患い、下半身の機能を失って車いす生活となった。千葉県夷隅郡御宿町で平成12年から車いすユーザーの視線で近隣市町村の公的・私的施設のバリアフリー調査を続け、６冊の福祉マップを作製し、さらに他市町村・学校等の福祉マップづくりに協力した。同町の町道・公共施設の設置・改善に当たり、バリアフリー化の視点から関係者に提言することもある。当初は同町だけを調査する予定だったが、夷隅郡全体に広げて調査を続け、マップ作りを行ううち、協力者やマップの希望者も増え、町民のバリアフリー化への意識が高まったり、交通弱者が自力で出入りできる施設が増えた。

（推薦者：田辺　義博）

後期高齢の重度障がい者の小さな小さな取り組みに、主催者は目を留めてくださった。感謝あるのみ。

マップ作りのきっかけは、インド・タール砂漠の旅だった。「トイレ休憩」「トイレ休憩」と、何度叫んでもバスは止まらなかった。添乗員が車いすトイレのありかを知らなかったのだ。多少ちびったのは確かだ。

帰国後、マップのない近隣市町村のマップ作りに着手した。平成12年は先進地の地図集め。平成13年から25年まで、６冊のマップを自費で出版できた。

・夷隅郡市福祉マップ（H13）　・鴨川市（H17）　・長生郡（H18）
・御宿町（H20）　・大多喜町（H20）　・御宿町（H25）

（掲載内容は下記 HP 参照）

印刷・製本を除き、調査項目の設定、調査の実施、ワープロやパソコンへの取り入れ、印刷会社との交渉、マップの配布等、すべて独りで行った。調査は、自らが出向き関係者から聞き取りを行い、実際に観察し、車いすユーザーの視点でまとめた。

最新版の御宿町マップは、公益的施設・食堂・洋品店などを網羅した。その他、新規に AED（自動体外式除細動器）の設置状況や避難場所を掲載した。マップは全て非売品で、最新版は御宿町社会福祉協議会で増刷してくれた。出来上がったマップは、高齢者・障がい者などの交通弱者に優先的に配布した。そんな人たちの外出に大いに役立っていると自負している。行政に携わる人・店舗の持ち主も関心を持ってくれ、施設設備の改善に努めてくれた。

独りでマップを自費出版したと言えば、噂にのぼる。でも周囲の人たちの協力抜きには、マップ作りは続けられなかったと断言できる。ましては個人情報保護条例が成立した平成15年の前後だ。はじめは、車いすユーザーの行動に警戒心が高かった。でもマップの必要性を時間をかけて説明をすると、行く先々、多くの人たちが賛同の手

を挙げてくれた。

《ぼくにも役立つことあったんだ》《ぼくだから役立つことがあったんだ》と、利他の気持ちが生まれ、ボランテアのはしくれになったような気がしてならない。住んでいる御宿町は、高齢化率千葉県一だ。高齢者を含めたより多くの交通弱者が、街中を闊歩できるよう、さらに充実したマップを誕生させていくつもりだ。

滝口仲秋さんのウェブサイト

http://www.takinaka1022.wordpress.com

認　定　書

滝口仲秋 様

あなたの行っている「 [illegible]市等の福祉マップ作成 」は、障害のある人に対する理解を深め、障害のある人もない人も共に暮らしやすい千葉県づくりを推進するためのやさしい取組みであることをここに認定いたします

あなたのこれまでの取組みに深く敬意を表すると共に今後の更なる強活躍を期待申し上げます

平成２６年３月２０日

千葉県知事　森田　健作

▲認定書

▲幼女を車いすに乗せる・・・ぼくにも役立つことがあった

▲障害者作業所での手伝い・・・ぼくにも役立つことがあった

▲施設・設備のバリアフリー化を調査し、パソコンで開示する

▲御宿町を中心とする町のバリアフリー状況を冊子（福祉マップ）にまとめる

▲他市町村の福祉マップ作りに協力する

▲マップの効能か、町内の施設に休憩用いす・車いす用トイレ等が増えた

▲施設・設備の改善について担当課長と話し合う

▲海岸遊歩道の35センチの段差がなくなる　（町役場提供）

特定非営利活動法人 珊瑚舎スコーレ

事務局長
遠藤　知子

沖縄県

代表の星野氏は埼玉県の自由の森学園という、競争に頼らない個性を伸ばす理念を基本に設立された私立中・高学校の校長を長年務め、退任後沖縄に移住し、もう少し小さな学校を作りたいと、2001年にフリースクールとして開校した。ゆくゆくは夜間中学も開校したいと思いっていたが、墨田区の夜間中学のドキュメンタリー番組“こんばんは”の制作に携わった先生から、「沖縄には戦争や貧困で義務教育を受けられなかった高齢者が多くいて、彼らには時間がないから、一刻も早く夜間中学を作ってほしい」と懇願され、2004年に設立を宣言。それが沖縄のテレビやマスコミに取り上げられ、強力な後押しとなって、20名の定員を超える応募があった。そこからこれまで14年間、戦中戦後に学齢期だった60～80歳を中心に、156人が入学し71人が卒業し、１/４は高校に進学している。毎週月曜日から金曜日、午後６時から９時まで、毎日３時間、９教科を教え、修学旅行もある全国唯一の自主夜間中学。

沖縄の小さな学校から

珊瑚舎スコーレは2001年に沖縄県那覇市に開校したNPOの小さな学校です。当初はアジア・沖縄を学ぶ専門部と高等部からスタートし、今では初等部・中等部も開設しています。夜間中学校は2004年に開設し今年で12年目を迎えました。もちろん自主夜間中学校です。ほとんどの自主夜間中学校は識字教育が中心です。ただ珊瑚舎スコーレは授業を「思索と表現と交流の場」と位置付けていますので、夜間中学校も同じコンセプトです。英数理社に音楽、美術、体育、三線（沖縄の三味線）、HRがカリキュラムに組まれており、年２回の学習発表会は昼間部の生徒と共同でおこないます。９歳から83歳までの生徒同士が協力しあいながら行事を作り上げています。

現在の平均年齢は77歳、入学した方は150名を超え、卒業後高校に進学する生徒も少なくありません。毎週月曜日から金曜日、午後６時から９時まで毎日３時間勉強します。初めて手にする鉛筆、辞書です。多くの生徒は沖縄戦で肉親を失い、自らも肉体的、精神的に傷つきながら精一杯生き抜いてきた人々です。学校に一度も足を踏み入れたことのない人もいます。名前が書けない、学校を卒業していないということは、この方々にとり生活が困難であること共に、人間として自信が持てないという２重苦を負うことになりました。「人生でし損なっているのは学校に行くということだけ」「心に刺さっているトゲは学校に通うことでしか癒せない」「鉛筆はドラム缶より重い」いずれも生徒の言葉です。入学当初は役所や病院で名前が書けるようになりたいと切迫した口調で語りますが、半年もするとはっきりとした明るい表情に変化します。勉強への手ごたえを感じるからでしょう。同じ仲間に出会えた安心もあるようです。「自分だけがこんな苦労し、恥さらしの人生と思っていたら、もっと辛い人がいると分かった。第一自分のこれまでをなんにも隠さなくていい。初めて同級生と呼べ

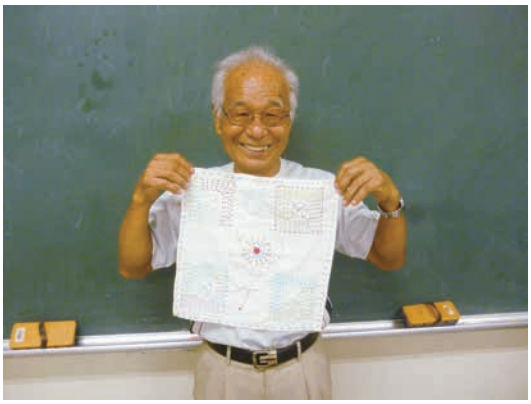
る人ができた」と語ります。仲間に出会い、それまで心の奥に仕舞い込んでいた様々な感慨を解き放つことができるようになったからでしょう。

学校が知識を競う合う場ではなく、知識を分かち合う交流の場となれば、「学校」という場、学ぶ行為は人にもっと豊かで深いものをもたらすのではないでしょうか。現にある生徒は「たえず学歴ではなく学校に行きたい、学びたいと思い続けてきました。自分は何のために生まれてきたのか。古い価値観を捨てて新しい自分を見つけたい」と語っています。

この言葉は私たちに人はなぜ学ぶのか、なんのために学ぶのかを問いかけています。こうした生徒の言葉に応えられるような「学校」を作り続けていきたいと思っております。

今回、他の受賞者の方々の活動を知る機会を設けて頂き、大変刺激になりました。場は違えども志が同じ方々と実際に顔を合わせて交流できたことは、これからの励みになります。関係者の皆様に感謝申し上げます。

事務局長　遠藤　知子



▲生活科の授業で刺し子の布巾が出来上がり笑顔の81歳の男子生徒

▲「ゆんたくあしび」ボランティアの方々に感謝を表すためのパーティー

▲英語の授業の様子

▲学習発表会での英語の発表の様子

▲個人文集の表紙作りの様子

▲授業前に教え合う生徒の様子

▲数学の授業でサポーターの女子高生にアドバイスしてもらう生徒の様子

岐阜県立岐阜高等学校　自然科学部　生物班

岐阜県

野生生物の保全に関する対策や、生理学及び生態学の研究に日頃から積極的に取り組んでいる。平成８年に顧問の高木教諭が、全国的にも希少なカスミサンショウウオを岐阜市内で確認し、平成18年から自然科学部生物班として岐阜市や岐阜大学等の研究機関と連携し、保全対策を進めている。保全対策としては、卵のうの保護及び飼育、生息地への放流等を行っている。生息地で確認された卵のうは平成19年には、６対ほどであったが、平成28年までに個体の放流を行い、平成28年には、過去最高の58.5対の卵のうが確認されるまでになった。生息地が市内に１ヵ所しかなく、環境変化による消失を懸念し、平成20年からは、２ヵ所の生息域外保全地にも放流を行っており、自然繁殖していることが確認されて、経過は順調である。保全対策以外に研究発表や地域住民を交えた放流イベント等周知啓発の活動にも力をいれている。

（推薦者：岐阜市長　細江茂光）

部　長
神戸　朱流

この度は、このような素晴らしい賞に本校自然科学部生物班が選ばれたことを誠に光栄に思います。

岐阜高等学校自然科学部生物班は、部活動の一環として10年間、カスミサンショウウオの保護活動を行ってきました。カスミサンショウウオは全国的にも希少な生物で、岐阜県内に生息地は３ヵ所しか存在しません。その中でも岐阜市の生息地は、活動開始当初の調査で卵のうが６対のみしか発見されず、大変危機的な状況にありました。そのため私たちは、生息地の環境整備、卵のうの保護、幼生の飼育、生体の放流といった保全活動を毎年継続して行い、生息地の再生に努めています。その結果、平成28年には58対の卵のうが確認されるなど、活動の成果が順調に表れています。平成20年からは、環境変化などによる絶滅のリスクを分散させるために、生息地の他に２ヵ所の生息域外保全地への放流を、岐阜市や岐阜大学と連携して行っています。２ヵ所の保全地で共に自然繁殖が確認されており、カスミサンショウウオが順調に定着しつつあります。

また、長年の保全活動を通して得たデータをもとに、大学等の研究機関と協力し、岐阜市のカスミサンショウウオの生態や遺伝的多様性を研究しています。そして、その成果を保全活動にフィードバックすることで、より適切な保全を模索しています。これらの研究や保全活動の成果は、学会や地域の様々なイベントで発表し、カスミサンショウウオ保護の周知啓発活動を行っています。

授賞式では、すばらしい賞を頂いただけではなく、さまざまな形で社会に貢献されている方々にお話を伺うことができ、とても有意義な時間となりました。どの受賞者の方も根気のいる活動を非常に長期間続けておられ、その苦労や強い信念をお聞きして、改めて活動を継続することの難しさと重要さを実感しました。また、私たちと同じように自然環境保護に携わっておられる方も多数いらっしゃり、今後の保全活動の大きな指針を得ることができました。表彰式典では大勢の方々の前で本活動が表彰さ

れ、誇らしく思うとともに、人知れず絶滅の危機に瀕しているカスミサンショウウオという小さな生き物が、この受賞をきっかけにさらに多くの人々に知ってもらえればと感じました。

今回の受賞を活動のさらなる励みといたしまして、今後も保全活動に努めて参ります。

元部長　髙橋　晃太郎

▲地域の方々と協力して生息地の整備

▲「第69回愛鳥週間 全国野鳥保護のつどい」での活動報告

▲カスミサンショウウオの DNA 抽出の様子

▲カスミサンショウウオの成体（右下：卵のう）

▲カスミサンショウウオの幼生の放流の様子

▲カスミサンショウウオ幼生の世話

▲地域の放流会を招いての放流会

特定非営利活動法人　クックルー・ステップ

福岡県

平成17年に福岡市で、重複障がいを抱える男児を持つ古賀裕子さんが同じく障がい児を持つ親たち６人と共に設立した団体。同19年に障がい福祉サービス事業所を開設し、自宅にヘルパーを派遣する居宅介護、放課後や長期休暇に障がいを持つ子どもたちの居場所となる放課後等デイサービスを行っている。日常生活動作の指導や集団生活への適応訓練の療育の場であり、障がい児を抱える親の一時的な休息や就労支援、学校との連携についての相談なども行っている。古賀さんらは障がい児・者を「可能性を秘めた人たち」という意味の「チャレンジド」と呼び、親たちが様々な情報を共有し合うことで、みんなで支え合い子どもたちの成長を喜べるよう活動を続けている。

理事長
古賀　裕子

この度の社会貢献者表彰を受賞できたことは、私たちにとってとても大きな喜びとなり、今後への力をたくさん頂きました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

３歳の障がいのある我が子を抱え、生きることに必死だったあの頃、同じように不安や心配がつきない仲間と、「私たちにできることは何だろう」「何かしなくては」という思いで平成17年に活動を始めました。

あれから11年。いろんなことがありました。私自身、大切な人を亡くし、息子の障がいも重くなり、とても辛い時期がありました。チャレンジド・kids（障がい児）を抱えた保護者の仲間もそれぞれ立ち止まることの多い日々だったと思います。それでも私たちはゆっくりではありますが、前に進んできました。子どもたちの笑顔と私たちを支えてくださる多くの方との出会いがあったから続けてこられたのだと思います。

チャレンジド・kids は私たちにいろんなことを教えてくれています。「人間は一人では生きていけない」「本当の優しさとは」「利益重視で自己中心的な生き方やスピード偏重の社会からは何も生まれない」「誠実に生きることの大切さ」「誰かを心から愛することができたら幸せだ」

今回の東京での受賞式には子どもたち３名も一緒に参加しました。発足からずっとともに頑張ってきた仲間も式典当日に飛行機でかけつけ、これまで支えていただいた関東在住の支援者の皆様にもお越しいただきました。これまでのことが色々思い出され、熱い思いがこみ上げて深い感動に包まれました。そしてとても清々しく幸せな時間でした。

今回、同じように多くの方がいろんな分野で活動されていることを知り、一人ひと

りの力は小さくとも、いつかそれが社会を変える力になるのだと確信しました。

これからも、チャレンジド・kidsが笑顔で暮らしていけるように、みんなで支え合える社会の実現に向けて、少しずつ一歩ずつ力を合わせて前に進んで行きたいと思います。

理事長　古賀　裕子

現在の活動

障がい福祉サービス（居宅介護、同行援護、短期入所）や地域生活支援事業（移動支援、日中一時支援）、放課後等デイサービス（放課後や長期休暇などの支援）、相談支援事業、ぴよサポート隊、クックルー通信の発行、君のポケット（自費出版本）の企画販売等を行っております。

▲2009年　夕陽をみんなでみよう（子どもゆめ基金助成金）

▲クックルー通信君のポケットコラム

▲2009年　ぴよ音楽隊

▲夏遊び「親子アロママッサージ教室」

▲車いす用雨カバー「ヌレント」

▲放課後等デイサービス「クックルーム」

▲2010年　チャレンジドクラブ

▲2015年　クックルーム親子交流会

福　祉

涙を勇気にチャレンジ

小さな手のぬくもり

▲2011年　西日本新聞コラム「涙を勇気にチャレンジ」

一般社団法人　海っ子の森

三重県

三重県南部紀北町の一部の海では、海藻の森が無くなり、海底の岩場がむき出しになる砂漠化した「磯焼け」と呼ばれる状態で生物多様性が失われている。この状態を知って2004年から鳥羽市水産研究所の指導・協力を得て、漁協者および市民の参加によりこの問題の解決に取り組み始めた。主な活動は自然石に海藻の苗を取付け岩場に設置する「鳥羽工法」と呼ばれる植樹技術で海藻を育成している。2010年には組織を一般社団法人化し、山の環境保全が海藻の育成にも有用なことから、山の環境保全活動も併せて行っている。

代表理事
山下　達己

この度は、名誉ある社会貢献者表彰をいただき心よりお礼申し上げます。

私たち一般社団法人海っ子の森は、12年間、「海の森を未来に届けるプロジェクト」をテーマに掲げ、活動を行ってきました。

海っ子の森の活動は、三重県鳥羽市にある鳥羽市水産研究所の職員の方との出会いから始まりました。

私たちが子供のころから見ている海は、外見上は昔から変わらない景色が広がっています。しかし、鳥羽市水産研究所で聞いた海の現実は違っていました。海の中では磯焼けと言われる海の砂漠化で、海藻が無くなる現象が三重県の沿岸で見られるようになり、その現象は広がり続けていると言うのです。その問題は三重県だけではなく日本全国のあちこちで起きているとの事でした。

この現実に、海で育ち、海が好きなメンバーが集まり海っ子の森サークルとして活動を始じめ、多くの人達の力により海の森づくりを行ってきました。磯焼けにより、海藻の森（藻場）が無くなった海では、魚が居なくなるだけではなく多くの生き物が住めない場所になってしまいます。このことにより、漁獲高が減少し魚を採り生活を行っている漁業者にまで影響が出ています。

そもそも海藻（藻場）は、海にとってどのような役割を持っているのか？

藻場は魚たちの産卵場や隠れ家の他、魚やサザエなどの貝などの餌場でもあり豊かな海の生物多様性の宝庫となっているのです。他には海藻も当然、海の植物でありCO_2を吸収し酸素を出しています。磯焼けと言った問題は、我が国の海洋資源を蝕んでいることから、国や県もその問題解決に取り組んでいます。しかしそのスピードは速く数十年で日本全体の40％もの藻場が消滅したとも言われています。

藻場造成は、山の植林とは異なり膨大な費用が掛かることから、国や県の事業となっています。しかし、鳥羽市水産研究所では漁業者と小規模ながら自分たちの海の現状と向き合いながら藻場造成を行っていました。その現実を知り、市民による海の森づくりが出来ないかと言ったことから、海好きのメンバーが集まり、私たちのテーマでもある「海の森を未来に届ける」を思いに海っ子の森が誕生しました。

鳥羽市にある答志島の漁業者は、３世代に亘り海の森づくりを行っています。

海っ子の森の活動はまだまだですが、山の植林活動のように海にも海藻の植林が必要であることを私たちの活動を通じ多くの人に知って貰うため、メンバー一同これからも頑張っていきます。

今回、授賞式では、私たち以上に素晴らしい活動をされている方々との出会いに、今後の活動への力を貰うことが出来ました。

社会貢献者財団および関係者の皆様ありがとうございました。

メンバー一同

▲伊勢エビの放流体験

▲海の豊かな森づくり

▲海藻を付ける石にメッセージ

▲海藻教育

▲海藻苗植林の様子

▲市民ダイバーと海の森づくり

▲小さな漁村での海の森づくり

▲植林した海藻にイカの産卵

特定非営利活動法人　反貧困ネットワーク広島

広島県

平成21年に広島市で「生活困窮者に人間らしい生活と労働の保障が実現するよう」法律家や市民が連携し、行政などへ政策提言や意見表明を行い、多重債務や生活保護問題への相談や路上生活者等のため緊急一時宿泊所の運営を行おうと発足した。現在、同市内に11室のシェルターの運営を行っており、平成28年12月時点で999名が利用した。しかし、シェルターを出た後の住居探しには「連帯保証人」や「緊急連絡先」が必要なことから困難であるため、部屋探しの手伝いも行っている。シェルターを利用する人は生活保護を初めて受ける人が多く、シェルターを出て住居を構えられても生活の困窮が続くことが多いことから、こうした人たちが孤立しないようにサポートする憩いの場「ほっとサロン」を運営し、食事会の開催や話し相手になるなどの活動も行っている。

（推薦者：中本　忠子）

理事長
秋田　智佳子

この度は、「社会貢献支援者」として表彰をいただき、誠にありがとうございました。

私たちは、2008（平成20）年の暮れ、仕事と住まいを同時に失った方を、年末の寒さと飢えから救済しようと法律家や市民が集まって支援活動を開始しました。「所持金が無くなって行くところがない。」「何日も食べていない。」「昨夜も路上で寝て寒くて凍えそうだ。」という相談が次々に寄せられ、本当にこれは日本の出来事なのかと愕然としました。福祉事務所に付き添って生活保護の申請に行き、保護決定が出るまで、金券ショップで安く購入したカプセルサウナの回数券と食費、支援者から提供された防寒着を渡すなどして支援をしていましたが、あまりに相談が多かったため、多くの方を支援するにはアパートを借り入れてシェルターとして活用するしかないと考え、１室また１室と必要に迫られ、部屋を増やしてきました。現在、路上生活者等のための緊急一時宿泊所（シェルター）は広島市内に11室となり、2009年５月以降、2016年９月15日までに963名もの方が利用されました。シェルターを出た後の住居探しには「連帯保証人」や「緊急連絡先」が必要なことから、部屋探しの手伝いを行い、また、孤立しないよう憩いの場「ほっとサロン」を運営し、食事会の開催や話し相手になるなどの活動も行っています。

今回、社会貢献者表彰式には４名が参加させていただき、前夜祭、授賞式と、さまざまな面でお心遣いをいただきました。

同じ貧困問題に取り組んでおられる生田武志さんを始めとした各受賞者や団体の功績紹介があり、様々な苦難に直面しながら困った方を救済したいという共通する思いで活動を続けてこられたことを知り、また各受賞者の方々と苦労話や課題を話し合い、交流を深めることができました。

受賞式の後、12月初めに広島駅地下広場で恒例の年末年越し相談会を行ったところ、面談と電話の合計129件もの相談が寄せられました。

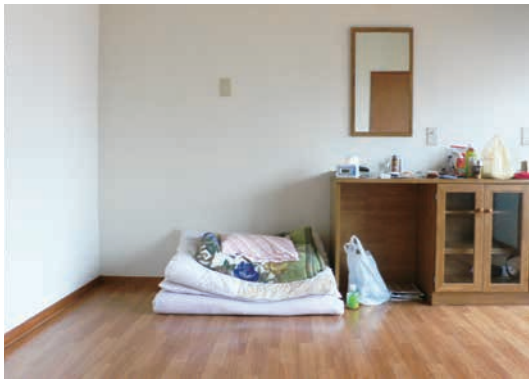
12月８日付けで相談会の模様を写真で紹介しながら、社会貢献賞受賞についても掲載いただき、記事を読まれた方から食材や衣類の提供も寄せられるなど、より多くの方に私達の活動を知っていただくことができました。

自宅で食べることができない子ども達に食事提供されている「食べて語ろう会」中本忠子さんとともに、この広島の地で、生活に困窮した方々の支援を続けていくよう、大きなエールをいただいたように思います。ありがとうございました。

理事長　秋田　智佳子

▲相談会受付

▲お食事会


▲シェルター内

▲ほっとサロンでの相談会チラシ折込み作業

▲ほっとサロンで鍋を囲んでいるところ

▲駅地下広場相談会

社会福祉法人　仙台いのちの電話

理事長
飯岡　智

宮城県

1982年11月１日に全国15番目のセンターとして仙台市で開局し、電話を通じて相談者の心に寄り添い、一筋の光をともに探し求め、生きることの大切さをともに考え、悩みを共有する地道な活動を継続している。1997年より24時間365日相談を開始し、2000年から相談員を養成する研修担当者の養成講座を開始し、2015年までに594,657件受信している。また、2006年10月からは自死遺族支援わかちあいのつどい「すみれの会」を開始し、来談者448名、2009年12月からは若者を支える「インターネット相談」を開始し、2,964件相談を受けている。東日本大震災後は、辞任・休止の相談員が増え相談員養成の講座の参加者が減少しているが、そのような状況でも志を持った新たな相談員が誕生している。事業案内、広報紙、ホームページ、リーフレット、講師派遣、無料の公開講演会、講座を開催し、幅広く市民の方々に活動の周知、理解と協力を呼び掛けている。また、他の相談機関との連携を図って、自殺予防の活動を行っている。

（推薦者：広瀬川倶楽部　坂上満）

社会貢献支援財団表彰に感謝し「これからも謙虚に活動してまいります」

『あなたがたは「いのちの電話」の全国15番目のセンターとして昭和57年に仙台市に開局平成９年に24時間受付を開始して以来59万件以上の電話を受信また同18年には自死遺族支援わかちあいのつどい「すみれの会」の開設公開講演会などを行い幅広く市民に活動の周知や理解協力を呼びかけるなどにより自殺防止の活動を続けられています。よってここにあなたがたの功績をたたえこれを表彰します。平成28年11月28日公益財団法人社会貢献支援財団会長　安倍昭恵』これが式典当日、安倍会長から頂戴した表彰状に書かれてあった内容です。現在、この表彰状は仙台 LL センター事務室棚に置かれ、相談員の皆様に見て戴いているところです。身に余る光栄であり、安倍会長に心より感謝を申し上げますと共に私共の活動を評価してくださり、表彰対象候補者として推薦戴いた広瀬川倶楽部代表坂上満様にも、衷心よりお礼の言葉を述べたいと存じます。

あえてここに表彰状の内容について書かせていただいたのは、ここまで詳細に活動内容が紹介された表彰状を見たことがないからです。表彰を受ける側としては、自分たちの活動内容をよく理解していただいたという気持ちになり感動した次第です。仙台いのちの電話は今年で開局35周年を迎えました。礎を築かれた諸先生方からの積み重ねで今日を迎えていることを考えますと、今回の受賞は大変感慨深いものがあります。併せていのちの電話は国内すべての都道府県にセンターが展開されており、今回の受賞はいのちの電話に対する評価でもあり、明日からの活動の励みなります。

この度の表彰を通して多くの学びがありました。何よりも驚いたのは、全国に深い志を持って頑張っている方々がたくさんいらっしゃるということです。どの団体の活動説明を聞いても思慮深く、人としてするべきことを躊躇なくしていらっしゃる。本

当に勉強になりました。ある団体は戦争で失った青春という時を取り戻すために、戦争で学校に行けなかったおじいちゃん、おばあちゃんの為に学校生活の提供、修学旅行の企画まで実施されておられました。提供を受けたおじいちゃん、おばあちゃんたちの顔が浮かんでくるような思いでした。

毎日、テレビから流れてくるニュースからは明るい話題のものはあまり流れてきませんが、受賞者の皆さんの活動報告には大きな勇気を戴きました。挨拶の中でどなたかもお話しされておられましたが、「日本も捨てたものじゃない」そのように同感の思いがいたしました。社会を照らす方々と出会えたことに感謝し、評価いただいたこれまでの活動をこれからも謙虚に続けて参りたいと思います。

事務局長　坂本　陽一

▲電話相談室の風景

▲2016年７月　一泊研修会小グループ

▲2016年７月　相談員一泊研修会全体会

▲インターネット相談風景

▲相談員一日研修会の風景

大山の頂上を保護する会

鳥取県

鳥取県大山町で、大山の自然環境を再生させる取り組みを行っている。大山は昭和40年代に始まった観光ブームで頂上登頂が盛んになるにつれ、高山植物群が踏み付けられて後退を始め、60年ごろには裸地化し、地表は雨や霜、雪にさらされ、土壌侵食が進んで容積およそ290m^3、所要土石量400トンに及ぶ深い浸食溝が形成され危機的な状況になった。これを見てきた地元の人々が昭和59年に官民合同の現地調査を実施して復元への行動を開始し、翌年に「大山の頂上を保護する会」が結成され「一木一石運動」が始まり、植栽事業と浸食溝の埋め戻し事業、登山者への理解と協力を呼びかけ、現在、山頂区域のほぼ全面に多種類の植物を復元し、浸食溝の大半を埋め戻すことができた。

（推薦者：桝水自治会）

副会長
松岡　嘉之

国立公園指定80周年を迎えた大山・「大山の頂上を保護する会」の結成30年記念すべき年の「社会貢献者表彰」受賞に感無量

「霊峰大山」は国立公園に指定されて今年が丁度80年、「大山の頂上を保護する会」を結成して30年の節目の年になります。この記念すべき年に公益財団法人社会貢献支援財団様の名誉ある「社会貢献者表彰」をいただくこととなり、関係者一同感無量で、大変光栄に思っております。

式典の表彰式では、安倍内閣総理大臣夫人の安倍昭恵会長のご挨拶につづき、内館牧子表彰選考委員長により選考の経緯についての説明、第二部祝賀会では、日本財団笹川陽平会長からのご祝辞・乾杯を始めとして、皆様から心に残る温かいお言葉を頂戴し、多くの感動をいただきました。

「大山の頂上を保護する会」は、大山を愛する人たちがみんなの力を結集しあって、特別天然記念物ダイセンキャラボク群落を中心とした大山頂上周辺の自然環境保護と登山道の維持・保全を行うことを目的に掲げ活動しています。

大山は、昭和40年代の登山ブームにより、山頂は裸地化が進み、深い浸食溝ができました。

日本及び鳥取県の宝である大山の山頂を元の姿に復元しようと昭和60年「大山の美化を推進する会」が母体となり、地元の自然保護団体・自治会・山岳団体・行政と官民一体となった「大山の頂上を保護する会」が結成されました。登山者が木の苗や石を一つずつ持って山頂まで運ぶ、官民一体のユニークな「一木一石運動」を実施し、頂上への植栽や、浸食溝の埋め戻しなどの保全事業を行うと同時に、頂上の植生復元の調査・研究も行っています。

大山を愛する多くの人々のご理解とご協力により、現在では、緑美しい山頂をほぼ

復元できました。

私たちは先人から受け継いだ大山の豊かな自然と恩恵に感謝しながら、この素晴らしい山「大山」を安らぎと癒しの場として今後も守り、後世に継承することを目的に、さらなる活動を展開してまいります。

最後になりましたが、「社会貢献者表彰」に相応しい活動を今後も継続し、次の世代に引き継ぐ決意であります。４名もご招待いただき、社会貢献支援財団の皆様には大変お世話になりました。心より御礼と感謝を申し上げます。

副会長　松岡　嘉之

▲裸地化した山頂

▲1986年５月18日　初作業の様子

▲ヤマヤナギの植栽
大山の厳しい環境でも育ちます

▲コモ伏せ作業　植物の根付を良くする

▲南光河原石拾い　流出してしまった石を集める

▲登山者が山頂まで石を運びます

▲緑は戻ったものの、在来植物を守るため、外来種をとりのぞきます

▲山頂を保護する会　2016年ポスター

▲山頂定点調査を毎年行っています

▲ここまで緑が戻りました

NPO 法人福岡すまいの会

理事長
横溝　高廣

福岡県

福岡市内のホームレスに対し炊き出しでの相談支援等を2002年からスタート。彼らと話をする中で、受給できるはずの年金が受け取れない人、年齢や障害等で生活保護を受ける必要がある人、皆住所が無いゆえ受給できないと判明した。そこで、今の生活を抜け出す為には、「ハウジングファースト（まずは住まいから）」と理念をかかげ、無償の保証人活動や、民間不動産を利用した入居支援などの住居支援を柱に、活動を開始した。当初は個人的な立場で入居者の保証人になると、問題が次々と発生したことから、2003年に団体を法人化してリスクを回避するため団体で部屋を借り上げている。家賃は利用者から団体が徴収する仕組みで、高齢者が多いことから、月に１度の集会と彼らを見守る管理人を常駐させ、近隣ではお互い見守りを行っている。この他に就労支援活動も行っており、福岡市の委託事業として就労自立支援センターを運営し、昨年は108名が利用した。また、電話・対面による相談にも応じる活動や、「喫茶昭和じかん」という、昭和の内装・価格を再現した月１回のイベント喫茶店で二人分を注文して一人分を誰かのために保留しておくこともできる保留システムを取り入れて、誰でもご飯が食べられる場所を目指して活動している。

この度は、社会貢献者表彰という大変栄誉ある賞を頂き、職員一同、感謝の気持ちと共に今後の活動の励みとなりました。

盛大な授賞式に列席させて頂き、当会の活動内容からすれば別世界のような気持ちでした。安倍会長、さらには日本財団の笹川会長のお話をお聞きする中で、特に印象に残った言葉に「草の根」という言葉がありました。全国で活動されている団体の方々と共に、草の根の活動で、より良い社会にする為に頑張って欲しい、小さな力が大きな力になるという言葉に、希望を感じ深く感銘致しました。これからも、私たちに出来ることを積み重ねて行きたいと思います。

私ども「福岡すまいの会」は2002年に有志市民により「ハウジングファースト」の理念のもとホームレス状態にある方々に「すまい」を提供し、部屋で生活することに加えて「住所」を得ることで、年金受給や生活保護などの各種申請が出来るようにお手伝いするために発足致しました。改築前の博多駅には、夜になると段ボールや新聞紙を寝床に大勢の方が寝泊まりし、失業、疾病、障がい、DV、借金、依存症など、当事者それぞれが様々な事情を抱えながら、ホームレス状態に至っていました。そのような状況を見て、路上生活から何とか抜け出せるように手助けしたいという思いから始めた活動が住居支援でした。

最初に、アパート入居時の連帯保証人を無償で受ける活動を有志で開始し、福岡市内や近郊地区での居住支援を行ってきました。一端住居を提供しただけでは生活の維持が難しいケースも多く、再路上化を避けるために、会全員で試行錯誤しながら、様々な取り組みを進めていきました。例えば、管理人による見守りや、月１回のサロンや集会、年１回の日帰り旅行等を行い、孤立化を防ぐようにしました。

また、当初から住居の保証人だけでは無く、就職活動に必要な一時的な住所の提供や面接日の取次連絡などの就労支援を行っており、その活動が認められ福岡市との協働事業や委託事業の受託へと発展していきました。この就労支援を通じて、延べ1,000人近い老若男女お一人お一人の課題解決のお手伝いから、就労に至るまでのサポートをし、今日に至っております。

私たちが活動の中で学んだことは、結局人に寄り添えるのは仕組みや制度ではなく「人」そのものだということです。当会は、今日、時代は変化しようとも、変わらず、人に寄り添い、出会った方々の杖となって、そっと支えながら、これからも精一杯、活動してまいります。

全国の素晴らしい方々との出会いを嬉しく思いながら、当会のこれからの活動に生かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

理事長　横溝　高廣

▲炊き出し相談会

▲“お金があってもなくても食べられる”喫茶昭和じかん

▲福岡市委託事業　福岡市就労自立支援センターの職員

▲年中行事の新年の集い

▲温泉旅行

▲和白サポートホーム月例集会

▲お盆の祭壇